



小樽港開港120周年記念のみなと見学会を実施

～小樽港の役割や歴史を市民に紹介～

小樽開発建設部は、小樽港開港120周年を記念して一般市民を対象とした、港湾業務艇「ひまわり」での小樽港みなと見学会（小樽港湾事務所のみなとの資料コーナー見学を含む）を下記のとおり実施しますので、お知らせします。

小樽港は、1899年（明治32年）8月4日に外国貿易港に指定され、今年で開港120周年を迎えました。小樽市では、これを記念して、小樽港や近隣に拠点がある関係公的機関の船舶を市民に紹介し、理解を深めることを目的に、官公庁船6隻が集結し一般公開等が行われます。

小樽開発建設部では、これらの記念行事の一環として、一般市民の皆様には港湾業務艇「ひまわり」にて海の上から小樽港を見学していただき、小樽港湾事務所にある「みなとの資料コーナー」にて小樽港建設の歴史的な資料などを紹介します。

記



1. 開催日時 令和元年10月6日（日）10:00～15:00
2. 開催場所 小樽港第3号埠頭 18番岸壁
3. 受付時間 午前の部：受付10:10～（先着20名）出港10:30～戻り12:00予定
午後の部：受付13:00～（先着20名）出港13:20～戻り14:50予定
※午前・午後それぞれ定員に達した時点で締め切ります
※小樽港湾事務所の「みなとの資料コーナー」見学を含みます
（別紙1「運航経路図」、別紙2「資料コーナー」参照）
4. その他注意事項
 - ・当日は、天候や海象条件により中止になる場合があります
 - ・海上での見学時には、傘の使用は出来ませんので、雨衣等を持参ください
 - ・船への乗り降りのため、歩きやすい靴をお履きください
 - ・船ではデッキからの見学となりますので、動きやすく暖かい服装でご参加ください
 - ・港湾業務艇「ひまわり」は、みなと見学会のみ実施するため、船内見学は行いません

【問合せ先】 国土交通省 北海道開発局 小樽開発建設部

広報官

田中 邦彦 (0134-23-9910)

小樽港湾事務所保全課長

廣部 俊夫 (0134-22-6131)

(小樽開発建設部ホームページ) <https://www.hkd.mlit.go.jp/ot/>



小樽港湾事務所 資料コーナー

小樽港ゆかりの人物



ひろ いま
広井 勇 (初代小樽築港事務所長)

明治30年に初代小樽築港事務所長となり当時は世界が注目する大規模プロジェクトであった北防波堤建設の計画から施工に至るまで従事し、その間画期的な新機軸をつぎつぎと生み出し見事に建設に成功しました。その第一は我が

国で暗中模索をつづけたセメントコンクリートの製造方法を確立し、増強・増量材として火山灰の使用を決定したこと、第二には波浪の最大の力を求めるため、波力の現地観測を行い、今日まで広く利用されている波力算定法である「広井公式」を提案したことです。

所長在任中の明治32年、東京帝国大学教授に就任した同氏は世界的には橋梁工学の権威として尊敬されていますが、むしろ日本では港湾工学の大学者として有名であり、築港工事の監督者の手引書をして書かれた「築港」という著書は広く知られています。



いとう ちやう えもん
伊藤長右衛門 (第3代小樽築港事務所長)

広井博士に見込まれ明治35年東京帝国大学卒業後ただちに小樽築港事務所に勤務。

明治42年に第3代小樽築港事務所長となって以来、留萌港、室蘭港、函館港の所長も務め北海道の港湾建設に大きな足跡を残しました。この間、小樽港では大型ケーソンを斜路で進水させたり、ケーソンの遠距離廻航(小樽港から留萌港まで)等新しい方法を積極的に取り入れ工費の節減、工期の短縮をはかっており、また大正元年にはケーソン製作用にス

チームクレーンを設置するなど、築港工事史に特筆する画期的な功績を残しています。



資料コーナーの概要

明治30年5月、小樽港の本格的な築港の先駆けとなった北防波堤建設のために開所された小樽港湾事務所(当時は旧北海道庁土木部小樽築港事務所)は、我が国の港湾建設において先覚的な役割を果たし、世界に誇り得る功績を残してきました。

資料コーナーは、歴史的事実を証する資料を一般の方々にも公開し、港湾に関する理解を深め親しみを抱いていただくよう、昭和59年1月、旧見張所を改造し開設しました。その後、平成5年7月に事務所構内に移転され、平成11年3月に事務所新築時に併設する形で現在に至っております。

室内には小樽港建設の歴史をふりかえる貴重な資料、写真、模型などを展示しているほかビデオを上映しており先人たちの知恵と努力が息づく歴史的価値のある築港史が展開されています。



長期試験用供試体

北防波堤着工当時(明治30年)の我が国のコンクリートの製法などは暗中模索の時代であり、小樽港の大規模なコンクリート工事には、技術者はもとより時の政府も重要な関心を注いでいました。

このような中で、初代小樽築港事務所長広井勇博士は、コンクリートの長期耐用を調べるため、北防波堤着工の前年から長期試験用供試体(モルタルブリケット)を製作し始め、最終的には昭和初期までに総数60,000個に及ぶ数の供試体が作製されました。その大部分は既に試験済みですが、100年たった現在でもまだ約4,000個が保存されております。

この試験の対象としているのは、主としてセメントの種類、配合割合、養生方法、細骨材の産地・種類、混合材(火山灰)の差によるコンクリート(モルタル)の耐久性・強度ですが、当時としては実例の少なかった火山灰混入についても綿密な試験が行われています。明治35年からは実際の工事へも応用され、火山灰を混和材としたコンクリートブロックの製作が始まりました。

このような試験結果をもとに建設され、築港後かれこれ1世紀をも経ながら堅固に港をまもっている小樽港の防波堤はコンクリート技術史上、我が国はもとより世界に誇るべき港湾構造物と言えるでしょう。



標準混合機



鉄搦機



かくはん機



抗張力試験機